若者を考える、若者と考える

# YOUTHSERVICE

VOL. 40

若者と支援者をつなぐ広報誌

YOUTHSERVICE VOL. 40

2022年12月5日発行

## 特集 街中で若者が集えるところ

8 高校生と作ったページ
元高校生が「18歳成年」について考える

10 シリーズ
はたらく若者 最終回

12 TOPICS
『SDGs×YS』～最初の一歩～

14 ユースかわら版
多文化体験プログラムしています ほか

CATCH YOUR DREAM

京都つくば開成高等学校

通信制 / 単位制 / 普通科

学校説明会

場所 本校舎2階　時間 14:00～16:00（受付 13:30～）

内容 学校紹介、募集要項説明、校舎見学、在校生による学校生活の紹介、個別相談

6月 11日[土]　7月 9日[土]　9月 3日[土]※　10月 1日[土]　11月 5日[土]　12月 3日[土]※　1月 7日[土]※28日[土]　3月 11日[土]

※9/3・12/3・1/7は10:00～12:00（受付9:30～）も開催します。

アクセス
- JR「京都駅」改札より北西へ徒歩8分
- 京阪電車「七条駅」3番出口より西へ徒歩14分

〒600-8320 京都市下京区西洞院通七条上る福本町406番

できる限り公共交通機関をご利用ください。

お問い合わせ（日・祝除く 9:00～17:00）

TEL.075-371-0020 FAX.075-371-0021

E-mail:info@tkaisei-kyoto.jp

URL:https://kyoto.tsukuba-kaisei.ed.jp/

特集

# 街中で若者が集えるところ

若者は、学校や家庭、部活、サークル、塾、習い事以外の場所でどのように過ごしているのでしょうか。今回の特集はそのような問いから生まれました。

生活の中で自分が選択できる余暇の時間。読者のみなさんは、どのように過ごして来られましたか？　また、普段どのように過ごされていますか？　今回の特集では、2つの団体で過ごす若者の姿を、その場をつくっている方の視点や想いから垣間見る形を取りました。ほんの一部に過ぎませんが、街中にそういった場所があることや、それが移行期の若者にとってどのような場所になりうるのか思いを巡らせるきっかけになれば幸いです。

## ぷちメッセージ

### 若者のミカタ

公益財団法人
京都市ユースサービス協会
専務理事
上田 廣久

2022年７月にこの役職となりました。それまでは京都市職員で、子育て支援や児童福祉、地域教育や青少年育成に関わりました。

私が学生で就職を考えた時は、企業でのお金儲けは苦手と思い、教員採用試験は通らずに、市役所には入れて、定年まで勤めました。

しかし、今の時代は、終身雇用は少なくなりましたし、インターネットの普及等で、仕事や働き方は多様になっています。そして、感染症はじめ、地球環境や世界情勢など、心配事が多い世の中です。

そんな中で、これから若者が成長し、進路や生き方を探して幸せになれるように、私たちは、若者の「見方」を理解して、若者の「味方」になりたいと思います。京都市ユースサービス協会の目標は、「若者が生きやすい社会」をつくることです。

そのため、人が自然体で関わり合い、互いを尊重して信頼関係ができれば、力を合わせて目標に向かうこともできるでしょう。そのような場に、青少年活動センターなどがなれればよいと思います。

（「若者のミカタ」は、当協会が取り組んでいる、若者文化発信事業『ユスカル！（若者文化市）』のテーマです）

## ごあいさつ

公益財団法人
京都市ユースサービス協会
理事長
安保 千秋

本誌は40号を迎えました。皆様のご協力に深く感謝申し上げます。今後も「若者を考える、若者と考える」広報誌として発信を続けていきたいと思います。

さて、2023年４月、こども家庭庁が創設され、こども基本法が施行されます。こども基本法２条は、こどもを「心身の発達の過程にある者」とし年齢を定めておらず、こども家庭庁は、子ども・若者育成支援に関する事項の企画、立案、総合調整を行い、今後、若者政策に大きく関わることになります。すでに、政策決定過程におけるこどもの意見聴取とその反映及びこどもや若者の参画に関し、調査研究が始まっています。子どもから若者まで連続して切れ目ない支援を行うことは大事ですが、若者の独自のニーズがくみとれるのか、子どもの陰に隠れてしまわないか、積極的に参画する若者や支援の取組が始まった社会的養護出身者等以外の大多数の若者の意見表明や参画を進めることができるのかなど、心配な点があります。ともに注視していきましょう。

公益財団法人京都市ユースサービス協会は、京都市内7カ所の青少年活動センターと、子ども・若者総合相談窓口、生活困窮世帯の学習支援事業、社会的養護自立支援事業の一体的かつ効果的な運営を指定管理者として受託しています。青少年活動センターは、それぞれの施設・設備に特徴があって、個性的な事業活動をしています。また、厚生労働省から若者サポートステーションの運営を受託し、若者の社会的自立や職業的自立に向けた支援も行っています。

## ユースサービスの理念

「ユースサービス」とは、子どもから責任ある大人へと成長する青少年を支援することです。子どもたちが家庭、学校、地域社会、職場などを通じて成長し、自分自身の興味や関心を高める過程で、必要に応じて助言や情報、または多様な人的・物的資源が得られるような機会を提供します。そして青少年自身の積極参加によって、青少年と協働の豊かな地域社会を創り出すことを目的としています。

くらら庵

# 「学校や家以外で、やすらげる場所がほしい」

## 特定非営利活動法人Reframe くらら庵 朝倉 美保さん

私はくらら庵の隣で5年前から塾を運営しており、学校で過ごすことがしんどい人や勉強についていけない人に学習を教えてきました。塾にも不登校の人がいますが、まだ学習の段階ではない人は塾には来ることができないので、何か違う形で支援ができないかな、と考えるようになりました。コロナ禍に入って、ますます行き場所がない人たちが増えたタイミングで、ちょうど隣が空き家になったことから、1年半位前に不登校の居場所づくり活動を始めました。

当初はなかなか利用してくれる人がおらず、ニーズと合っているのか不安になったこともありましたが、さまざまなイベントをきっかけに認知度が上がっていきました。現在は小中学生23人が利用登録をしてくれており、毎日8人くらいがくらら庵に来てくれています。

それと同時に、くらら庵の運営に若者がボランティアとして関わってくれるようになりました。大学生や就職活動中の人、仕事後や休みの日に参加してくれる人もいます。現在50人のボランティア登録があり、そのうち毎週10人くらいが活動してくれています。ボランティア活動を通して「子どもと関わる中で自己肯定感が上がりました！」という人もいます。ボランティア同士で話す機会も多く、活動を通していろいろな気づきにつながっているようです。

また、昨年は、一人で悩んでいるだけじゃなくて、誰かと対話できる場が欲しい」という大学生がいたので、若者のための場所を作ろうと」緒に活動もしていました。

### 朝倉さんの想い

私自身は家の居心地が悪かったので、学校しか居場所がありませんでした。でも、もしその時に別に安心できる居場所があったなら、きっとそこに行っていただろうなと思うことが多いです。

くらら庵に来ている子どもたちは、学校への拒否感や不安な気持ちが強い子が多いので、まずはのびのびと楽しく過ごしてもらうことを優先して見守っています。保護者の方からは「学習をしないままでも大丈夫なのか」と聞かれることも多いですが、最近は通信制高校も増えて来ているので、まずは「学びたい」という気持ちを大事にしながら進路についても一緒に考えていっています。保護者が希望された場合にのみ学校とも連携していて、放課後などに学校に行ったときに先生と話をするきっかけになるように、日々どのようにくらら庵で過ごしているのか、どんなことが好きなのかなどを書面で報告し、出席日数にもカウントいただいています。現状としては遊びや交流目的の子は今のくらら庵で十分満足しているのですが、学校に行ってない分の学習を補うことが目的に見学に来る子もいるので、その子たちが過ごしやすい場所があってもいいかなと思っています。

また、ボランティアの若者の中にも、大学へ行く意味を見出せないと言う人もいます。ここでの活動の中で、学校の意味やりたいこと、楽しいことを振り返るきっかけになれば、と思っています。



# 「ここに来たら、自分を受け入れてくれる。そんな場所でありたい」

## ママキラ☆プロジェクト 上川 里枝さん

私たちは、これまで8年にわたって、地域で「カレーパーティー」を開催してきました。それが、子どもたちの口コミで広がって、多い時は90名もの人が食べにきてくれていました。コロナ禍になって、あらためて「私たちは何がしたいのか」を考えたとき、「こども食堂を立ち上げて活動の輪を広げること」。そして、「子育て中のママの居場所づくり」を、両輪で行っていく必要があると思いました。

そうして活動を広げていく中で、大学生からのボランティアの問い合わせが多くなり、今では50名が登録するまでになりました。

まず問い合せがあったら、一度面談をします。能力の有無は関係なくて、落とすための面談ではありません。その大学生が、何が好きで、どんな趣味を持っていて、どんな勉強をしているのかなど、その人を知るためのものです。その後、グループラインに登録し、行事ごとに声をかける形をとっています。

活動の後に、大学生だけで「振り返りのコーヒータイム」を設け、そこでいろんな話が出てくるんです。勉強のこと、恋愛のこと、就活のこと、家族の話からの親孝行や、居場所の条件に至るまで、深い話に発展することもあります。彼らは、自分達のことを「コロナ世代」と言っていて、他県から京都に出てきて、せっかくアパートを借りて一人暮らしを始めたのに、授業はオンラインばかりで、サークルもない。そんな彼らにとって、ママキラ☆プロジェクトのボランティア活動は、コロナによって自分の居場所を見失った若者達の、受け皿になっているのだと思います。

### 上川さんの想い

大学生のみんなに、ここを「自分の居場所だ」と感じてもらいたい。誰にだってしんどい時はあるし、そういう時に「あそこに行ったら話を聞いてもらえるかも。助けてくれるかも」と思ってもらいたい。ボランティアをしてもらうだけでなく、その向こう側にある「つながり」を大切にしています。

人は、「そこに居場所がある」と感じるのは、「自分が誰かの役に立っている」と感じられるときだと思います。だから、大学生に「誰かのためになっている。誰かの喜びに繋がっている」という実感を持ってもらえるように、活動しています。

大学生は、最初はみんな「初めまして」なのに、活動の後には、とても仲良くなっていて、自然にLINE交換をしています。そういう繋がりは、ここを卒業してからも、ずっと続いていくと思います。私たち自身も、若者との「ご縁の輪」が、ごろごろと大きくなっている実感があります。うちで活動している大学生は、本当にすごい子が多くて、コロナがなかったら、サークルや部活で活躍していたであろう子たちです。今後、ここを旅立ったら、きっと社会で活躍してくれると思います。そんな彼らが、いつの日か戻ってきて、また何か一緒に活動できる日がくるかもしれない。そうなったら、ママキラ☆プロジェクトを、次のステージに連れていってくれるような気がします。そんな未来を想像すると、本当に楽しみで、ワクワクします。

# 「ライブは楽しく自分を表現できる場」

## 京都MOJO 藤本 浩史さん

『MOJO』は1999年にオープンしたライブハウスで、オープン当初はブルースやファンク、ブラックミュージックなどの音楽を中心としたライブハウスをイメージしてたみたいですが、段々と若いバンドが増えて今は高校生の年代から働きながらという人まで、いろいろな世代の方が幅広いジャンルで演奏されていますね。

若い子に遊びに来て欲しいという思いから『高校生割引』という様なサービスもやっていたりします。高校生バンドイベントは定期的にをやっており、そういう時は沢山の高校生が観に来ます。友達のバンドを観に来たことをきっかけに、自分もここでライブやりたいって後輩がバンドを始めることもあって、自然と下の世代にも繋がっていくこともあります。高校生イベントでは、初ライブという人も多くフレッシュな感じですね。大学生になると、初めての人から何度もライブしている人もいて様々です。

最近の傾向として、女性でバンドをやる人が年々増えている印象があります。

また、コピーバンドさんとかだと、演奏する曲やアーティストの移り変わりが早いように思います。バンドのコピーというよりは、違うバンドの中から1曲ずつ好きな曲を選んでいることが多く、最近の音楽の聞き方に影響しているのかもしれません。音楽に関して、メディアも多様になって情報が膨大なので、そういう流行とかを若者達から学ぶことも多いですね。お店に出演しているバンドの割合としては大学生が多いです。大学で軽音サークルに入って始める人が多いですね。

やっぱり高校生のライブは感動しますよ。彼らにとってライブできるのってせいぜい年1～2回位なんです。そこに向けて練習してきていて、それを応援しようとする友だちの姿を見ると感動します。

その1回のライブってその子たちにとって本当に大事なものだと感じます。

たまに「昔出たことがある」という人と何年後かに再会するという素敵な出来事もあったりしますよ。

ライブって本当にいろんな勉強になると思っています。複数の人間で1つのものを作りあげて表現することや、ライブ当日は他のバンドやお客さん、お店の人とのやりとりもあって、必然的に人と関わる機会が増えます。

その中で礼儀を学んだり、楽しいことはもちろん、悔しい、苦しい思いもしたりする。実際自分もコミュニケーションが得意ではなかったんですけど、バンドをやることで成長できる事が多くありました。はじめは好みではない音楽でも、いつの間にか興味持てるようになって見聞が広がり、好きなものが増えるきっかけにもなると思います。

若い人はなかなか踏み込めず躊躇する人もいると思うんですが、やってみて損することはまずないし、普段体験できない熱狂があります。自分にとってプラスしかないと思うので、是非1度バンド活動やライブすることを体感してほしいですね。そういう場所でありたいなと思います。



# 簡単に奪われる若者の居る場所

ユースワーカー協議会代表
水野 篤夫

ここでは、若者が街中で集える場所の意味について少し書いてみます。最近の調査*で居場所の有無を聞く設問に対して、「家庭が居場所」との答えは80％以上あり、「家庭以外にも居場所がある」若者も70％あまりと、思ったより高い割合に見えます。しかし、家庭以外の居場所として多くの若者が挙げたのは、「友だち」「学校」くらいでした。では、学校・職場に居場所が無い〝残りの〟若者（9％近く）はどこで過ごしているのか？そして学校で居場所を失ったり、友だち関係が壊れたらどこに居場所があるのでしょう？先日会ったある大学3年の学生は、「大学入ってすぐコロナで、誰とも会わず日々が過ぎ、心を病みそうでした」と言いました。自分の力でいくらでも居場所を作っていけそうに見える若者ですら〝病みそう〟な社会。簡単に若者の居場所は損なわれるということが、コロナ禍で露わになってきたのを感じます。

「余暇」というととても軽い響きになってしまうのですが、家庭・学校／職場と別の「第三の空間」と言い換えるとその意味も受け止め方が変わるかもしれません。若者がそこで他者と出会うこと、居る場所を見つけることの意味は、ここまで紹介してきた活動からも見て取ることが出来そうです。「家庭が大事」といいつつ、もはや家族だけで生き抜くことは難しく、家族規範・学校価値で縛られることのない場を模索する若者がこれほど多いことを考えれば、若者が自由な時間・空間が探せたり、自分で作れたりする「余裕」もしくは許容する余地のある社会を作っていくことは、本当は若者に限らずとても大事なことなのだと思います。

若者が過ごす場所として、ショッピングモールやフードコート、映画館、カフェやファストフード店等をイメージする人もいるかもしれませんが、これらの場所は「お金が無ければ」居られない場所です。その意味で、図書館や公園といった公共的な施設の持つ価値は大きいのですが、若者が特に優先して使える訳ではないことから、さまざまな制約が課せられます（「私語は慎んで！」「球技禁止」「スケボー禁止！」）。またネット空間も重要さを増していますが、若者誰しもが自由に振る舞えるとは限らない（複数のアカウントでキャラクターを使い分ける若者など）ことに注意が必要です。ユースワークが大事にしている目標の中に、「若者とともに、若者の自己選択と決定が保証される自由な活動の場を作る」という考え方がありますが、青少年活動センターのような公共施設がそのための場になることはもちろんのこと、地域の各所にそうした価値観を保証できるような場が点在する形が作れたら良いなあと思うのです。青少年センターの無いエリア（例えばニュータウン等）にユースワーカーが出向いて若者と関わりを紡ぐ活動（アウトリーチ）や、夜遅い時間の居場所づくりをしたり、地域で若者と出会う大人がユースワークの価値観を知って、若者の側に立って地域・社会との媒介役となってくれるよう後押しをしていく活動などを通して、すべての若者に「余暇の自由空間」を保証することが出来ればと思うのです。

話をまとめると、そうした、壊されやすい若者の居場所づくりの営みを支えていく人が、「街」のいろいろな所にいる地域社会こそが、若者を「はぐくむ」ものなのだと思います。『YOUTH SERVICE』を読んだ皆さんにもその一員になってもらえれば！

*（註）18歳意識調査 第24回（子どもと家族）日本財団 2020年4月28日より

# 元高校生が「成人」について考える

高校生が作ったページ

区切りを迎える40号では、過去に制作メンバーとして参加してくれた高校生メンバーが登場してくれます!今回のテーマは、過去の高校生ページでも数回取り上げ考えてきた「成人」について。それぞれ年齢や所属が変わったメンバーが、あの頃を振り返りながら「成人」について語ります。

①お名前
②現在の所属など
③「高校生が作ったページ」でどんな活動をした?

①J(ジェイ)
②「ユースカウンシル」と、学習支援のボランティアを続けています。
③29号「高校生のおサイフ事情」の制作を担当。実は、その号だけの担当でした!

①みほ
②大学4年生で来年度から社会人です。
③高校1年生の時から3年生までの30号〜33号まで担当。「LGBTについての座談会」「平成と昭和」「はたらく姿」が印象深いです。

①上田
②大学1年生
③36号〜39号を担当。「ICカード」や「HSP」、「18歳成人」がテーマでした。

## 『高校生が作ったページ』の思い出

J：参加したきっかけは、高校3年生の冬、卒業まで3ヶ月あったので「なにしようかな〜」って思ってたら、誘われたことからです。教員になろうと思っていたので、大学生の時は学習支援のボランティアをしつつ、次第にいろいろ参加するようになりました。今でも、協会の事業に携わっているのは、この広報誌での活動があったからだと思っています!

みほ：私も協会の事業に参加するようになったのは、『高校生が作ったページ』の活動がきっかけです。同じ学校の友人に誘ってもらい、学校とか家以外でできる活動があるっていいなと思っていました。部活動が忙しくて一度活動は抜けたけど、高校3年生まで続けられました。

J：僕は、みほちゃんと入れ違いの号で活動したんです。制作会議の2日前にメンバーに誘われました(笑)。

上田：僕は、高校時代、土日は午前中が部活で埋まっていたけど午後は空いていたから、親の紹介で自習室を使いに来たのが初めてです。『高校生が作ったページ』への参加は、自習室を使っていた時にメンバー募集の掲示を見て声をかけてみた。

大学生になって、思ったより忙しいです。大学の交響楽団に入ったり、ボランティアとかバイトをやっています。

## 元高校生メンバーが考える「成人」って〜?

### 成人になった時を覚えてる?

J：僕が成人になったときの「成人」は20歳だったけれど、18歳選挙権が導入されていたから、高校生で投票に行ってたなぁ。初めての投票日は模試当日でもあったから、早起きして投票したのを覚えています。

みほ：私も初めての投票日は高校生で部活の朝練があったから、その前にダッシュで走って投票した記憶があります。

上田：僕は、19歳だけど、今年4月1日からの民法改正で成人になりました。大学生にもなって、生活スタイルが遅めになったなと感じます。高校生の時にはありえなかった0時前に帰ることもできるようになった。

J：僕も生活スタイルの変化は感じた。いわゆる「門限」がなくなったな。高校生のときは、わりと気にしていたけど、大学に入ってから徐々に門限という感覚がズレてきて、飲み会とか学校外活動の後のごはんとか行ったり。そうすると1日の終わりがどこかわからなくなる(笑)。

みほ：高校生の時はある程度決められていたけど、大学生になってからは自分の好きなスケジュールを組めるようになるからですかね。忙しい時と暇な時の落差がすごくて大変な時もあった。私はある程度決められている方があってるかな。

J：それでいうと責任は増えたと思う。大学に入ってから実感した。バイトするのも自由、授業サボるのも自由。高校生は先生に怒られるけど大学は単位落とすだけだし。

20歳という年齢を迎えて、「どんなことが伴うかを考えたことがあるか? 責任が増えるんだぞ」と言われたことがあった。

みほ：アルバイトを始めてそれを感じます。今まではいわゆる消費者側だったのが、アルバイトで接客側にまわることで、お客さん目線で動けるようになったのは大きな発見だと思います。お客さんから見ると店員はみんな同じに見えるから、どんな立場でもちゃんと対応しないとっていうのは思っていた。アルバイトの経験は大きかったかも。

### 「成人」が、18歳に変わっていいこととは?

みほ：成人になって責任は重くなったけれど、たとえば、大学進学で一人暮らしになって、全部自分がやるという意味での自立ができるようになるプラスの面もあるのかなと思います。私は一人暮らしではなかったので感じなかったけど、意外とそう感じる人も多いんじゃないかなぁ。

上田：僕もお金の判断が自分でできるようになったことはいいことじゃないかなと思います。高校生までは親にお金の使い道を話さないといけなかった……今も、行動の制約は結局あったりするから、まだ親の管理下にあるのかなと思うけど。

J：それと、教育の場で成人についての話題をとりあげやすくなったのではと思います。これまでは高校卒業して少し経ってようやく成人になったから、なにが変わるのかわかりづらかったけど、今はもうちょっと授業中とかでも取り上げやすくなったのかな。

今から成人になっていく高校生年代に対して、不安なことや使える制度とかを考えてもらう機会ができやすくなったよね。

### 自分が「成人」の年齢になった時、なにが変わった?

J：成人の年齢になった時が、お酒を飲めるタイミングだったからそこは区切りだったかな。大学に入ってからこっそり飲んでいる人はいただろうけど僕は守っていたし、そこが大きかったかもしれない。付き合いが広がる意味では、お酒が飲めるようになったことはよかったかも。

みほ：私はなんなら今も全然変わらないかも(笑)。

J：今は、成人と成人以下ではなくて、高校生と大学生の違いじゃないかな。僕の感覚としてはそうなってた。

みほ：他の国とかだと18歳よりも下の年齢が成人だったりするところもあるので、それだと18歳になるのはまた変化があるのかな。「成人＝大人」だと思うと大人は責任が伴うからそう思うと怖いのかも。

J：「やる・やらない」かにもよるかな。クレジットカードも、つくらなければその責任は課されないもの。ある程度いろんなものの分別がつく年代に成人になることで、自分で「やらない」ことを選ぶと生活は変わらないし実感はないのかもしれないですね。

みほ：私は、漠然と、社会人になるのは不安もありつつ楽しみもある気がします。大学生の時にアルバイトはしていたから、働くということがどんなことか高校生の時よりかはわかっているかと思うけど、今後は幅広い人と仕事していくことになると思うので、具体的に責任がどういうものかはわからないけど、責任を自覚して仕事していかないといけないのかなと思います。大学では授業とるとらないで会う人も変わるし、アルバイトでは国内外の人と話す必要はあったから高校時代よりかは会う人は広くなったと思う。

上田：部活動と家の往復をしてた高校生時期よりかは行動範囲が広がったのかな。大学も出会う人が多いしそれも高校の時から変わったことかなと思います。SNSでのつながりも増えました。でも、高校の感覚をあえて引きずっているようなところがあります。時間の使い方の発想が高校生のままの気がする。一般的にイメージしてた大学生の使い方とは違う。

みほ：人それぞれだと思うよ。

上田：ひとりでやることは多くなったかもしれないなぁ。自分の好きな時間の使い方ができますね。

みほ：高校はその学校の近隣の子が通う場合が多いけど、大学はいろんな土地から通っている人がいるから、大学でしか会えない人もいました。

J：僕も交友関係というか、関わる人物がだいぶ変わったかもしれない。大学の授業ひとつとっても自分で選ばないといけないし、その授業もどれも同じメンバーで受けてるわけじゃないし。高校では受験や就職とかそれぞれの個人の目標があるから血走ってる空気があったけど、大学では課題を出すためにいがみ合うより協力しようよっていう感じ。物事に対する関わり方がだいぶ変わったのかな。

今までは環境が変わるたび人間関係がリセットされていたけど、大学卒業後は、大学以外の活動で出会った人たちとの関係は変わらない。本当に続く人間関係ってこういう風につくられるんだなとしみじみ感じています。今後もそういった関係が変わっていくのが不安なところもあるし、楽しみなところもありますね。

### 『高校生が作ったページ』にメッセージをお願いします!

J：自分が『高校生が作ったページ』に関わったのが5年前ということに驚きですが、たった1回のこの活動が今の自分の活動に大きな影響を与えてくれたなと思います。そんな体験がもっと広がればと思います。

みほ：ふりかえってみて、いろんな記事を書かせてもらったなと思います。いろんな物事を考えられるようになったり、いろんな人と出会ったりしたのは今思うと嬉しかったな。高校の時に、高校生自身の等身大の思いを載せられる。高校生主体でやらせてもらえてました。高校生がこれからもこのページでいろんなことを考えられたり興味関心を持ってもらえたりしたら嬉しいなと思います。

上田：人に伝えるっていうのがやっぱり楽しかったです。同世代の人に出会って一緒に作るっていうのも楽しかったけど、やっぱり読んでもらえるっていうことに嬉しさを感じました。僕もなんだかんだ今後もこういう活動をやっていきたいです!

シリーズ

# はたらく若者

最終回

Vol.30からシリーズで連載し、10名の若者にインタビューした「はたらく若者」。職種や働き方もさまざまで、働くことに対する思いや考え方にも多様性があり、十人十色の生き方がうかがえました。

シリーズのまとめとなる今回は、当協会で働くユースワーカーで、これまでの「はたらく若者」を振り返りながら、「はたらくこと」をキーワードに語りあいました。連載してきた若者と同世代である3人が語る「はたらく」から若者の今をみつめます。

**木村**　これまでの連載を読んで「何のために働くのか」が、お金のために働くタイプと、将来やりたいことを叶えるために前段階として今の仕事をしているタイプと2パターンあるなと思った。それでいうと私は、お金のために働いているかな。

**田鹿**　「自由と自立のため」と話していた若者がいて、とても共感した。去年社会人1年目で、完全に親の家計から自立できた1年だったけど「こんなに自由なんや！」と思い、気持ちの面ですごく楽になった。私は、「働けなくなったら困るなあ」と思っているけど、どうですか？

**佐藤**　私は、お家が好きだから困らないかな。好きな本やゲームとご飯があれば生きていける！

**木村**　すごい（笑）。でもそうやって生きるためにはお金が必要だから、やっぱり働かないといけないよな。

**佐藤**　働かなくても食べていけるならそれがいいけど、それは無理だからね。

**田鹿**　なるほど。もし、パトロンみたいな人が現れて、お家の中に好きなものを全部用意されて、外に出なくてもいいよと言われたら、どうしますか？

**佐藤**　……たぶん、それでも働くと思う。働き方はフレックスな形に変えるかもしれないけど。

**田鹿**　働くのは「外に出るため」なんですね。

**佐藤**　外に出て違う人と話をしないと、考え方が広がらなさそうな気がします。本はすごく好きだけど、自分と本の世界だけだと広がり得ない部分があるだろうなと思うから。お家が好きなのと同じくらい、変化を望んでいるかな。安心感も欲しいけど、やっぱりチャレンジもしないといけないなと思う。

**田鹿**　木村さんはどうですか？

**木村**　私も働くかな。家で自分の好きなことをしてゆっくりする時間もすごく好きだけど、日常の中に面白いと思うこととか、ちょっと刺激が欲しいんですよね。たぶんずっと家にいたらそういうのって無いと思う。そういう意味では、お金を稼ぐためでもあるけど、変化をつけるって意味でも働く場所はあってほしいかなと思う。

**田鹿**　私は働いていないと罪悪感があると思う。「なんもしてないな、わたし」って。働いてみて私が悟ったのは、私は終わりが好きなんだということ。「やったぞ！終わった！」という。学生時代に勉強や研究をしていた時は、はっきりとした区切りや終わりがなかったんですよね。仕事だと、事業が終わった日とかは、家に帰った時のテンションが最高です（笑）。

**佐藤**　なるほど、筋書きと終わりを求めているんだね。

**木村**　終わりがあるってことは、あんまり考えたことが無かったな。

**好きなことを仕事にしたいという人もいましたが、みなさんはどうですか？**

**木村**　私はやりたいことを突き詰めた結果、就活で失敗したタイプです。

**佐藤**　何になりたかったの？

**木村**　なりたいものがはっきりとあったわけじゃないけど、大学は福祉系の学科で、就活でも福祉の業界ばかりを受けていて。でも、受けたところがダメだったり、いろんな職場を見に行ったりしているうちに、何がしたいのかよく分からなくなったんです。やりたいことを求めていくスタイルは私には合わなかった。だから、どこでもいいから入ってみて、とにかくやってみる方が自分にはあっているなと思う。

**田鹿**　人と関わりたいという思いはあったんですか？

**木村**　それは元からあった。あと、いわゆる企業のオフィスみたいなところで働いている自分がイメージ出来なかったかな。

**佐藤**　やりたいことがあってこの仕事を選んだ？

**田鹿**　私は、漂流してやってきたという感じです。大学では政策を専攻して、制度とか、人以外の仕組みについて学びました。学問とは別に、ボランティア活動などをしていく中で、自分が呼んでもらえるのは、人がいる場所だったと気づいて、人と関わるのは実は怖いんですけど、でも1回、生身の人間と触れ合ってみるかと思って、「これしかできないけど、やってみます！」という感じでこの仕事を選びました。

**佐藤**　漂着してきたという感じ、すごくわかる。私は、教育学部出身で、アルバイトとかも教育系のことをしていたから、この分野以外は無理だろうと思っていたけど、学校の先生になる自分はしっくりこなくて。仕事を選んだ理由は、全体的にぼんやりしているかもしれない。

**田鹿**　「これがやりたい！」と思って仕事を選んだ訳ではないけど、「これなら自分にもできるかな？」と思って選んだという感じですね。

**佐藤**　やりたいことを追求できるっていうのも一つの選択だと思うけど、別にやりたいことがなくても、のんべんだらりと生きていられるっていうことも大切なことかなとは思う。だから、どちらか一方にならないように、自分自身がありたいし、関わる人にも、どっちが良いって言ってしまわないようにありたいなと思いますね。

**あたなにとってはたらくとは？**

**木村**　いろいろあっていいんだな、です。働くことに対して勝手にハードルを高くしていたけど、働き始めると、転職経験がある人など、色々なパターンの人がいることを知って、よく言われる「なるべく定年まで続けろよ」とかはあんまり気にしなくてもいいなと思ったし、実際に働いてみて、自分にもできることはあるということがわかって、ちょっと気が楽になりました。働いてみて、価値観は変わりましたね。

**田鹿**　働けなくなったら嫌だな、困るなと思う。だから働きたいと思います。自由と自立が働く中で自分にはとても大きくて、でもそれだけじゃないなと考えていたのですが、さっき思い浮かんだのは、罪滅ぼしです。自由と自立と罪滅ぼし（笑）。そこまで考えなくてもいいのにと思うけど、私はそうだから仕方がないですね。

**佐藤**　いいやつになれる可能性。働かないと、自分を見直すことや、ちょっと違う生き物になりたいなという気持ちがなくなっていきそうだし、ずっと家の中にいたら、自分という生き物に凝り固まってしまいそうな気がする。働くことで、自分は日々変化する生き物でありたい、という気持ちを維持できるんだと思ってます。

TOPICS

# 「SDGs×YS」～ 最初の一歩 ～

ユースサービス協会では、京都独自の環境マネジメントシステムであるKESのステップ1を2007年に取得し、環境に配慮した取組・発信を続けてきました。昨年度より、世界共通目標であるSDGsの観点を今後の組織運営や事業展開に活かしていくために、所属を超えたタスクチームをつくり、他団体の取組事例の調査やSDGsカードゲームの試行等で理解を深め、事業との関連付けについて検討を重ねてきました。今回は、その取組と今後の方向性・展開についてご紹介します。

学習環境の整わない「中高生」を対象に、学習会を実施しています。

子ども食堂ネットワークやフードパントリー等、地域とともに子ども・若者を見守る活動に取り組んでいます。

スポーツ・レクレーション活動を通して多世代交流の場づくりをしています。

農業体験で、身体いっぱい自然と関わり、食のサイクルについて考えています。

清掃活動等の様々なボランティア活動で、青少年と地域の出会いを広げています。

## アクション1 協会スタッフ全体の意識化を図る（2021年10月）

SDGsをツールとした市民活動支援や普及活動をされている吉田隆真氏（有限責任事業組合 まちとしごと総合研究所メンバー／京都市下京いきいき市民活動センター副センター長（※当時））を講師に招き、研修会を実施しました。

**前半** 講義『ワカモノとSDGs』
・SDGs基本的概要の理解／裏側のアレコレ／SDGsに取り組む意義／SDGs実践例

**後半** ワークショップ
『SDGsの視点で既存事業をマッピング』
・（個人ワーク）各拠点の主要事業とSDGsの繋がりについてワークシートを基に検討
・（グループワーク）
ワーク内容をグループでシェアし、意見交換しました。

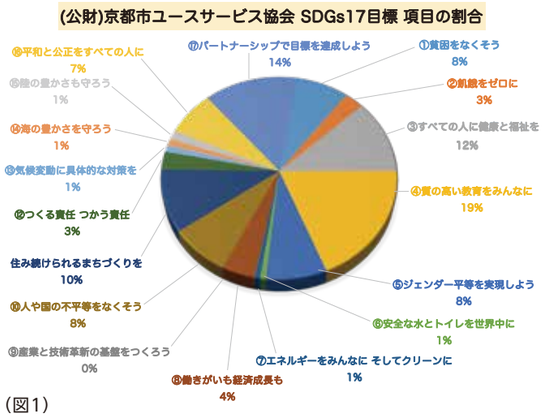
**まとめ** マッピング結果を集計し、当協会の事業はどのゴール（目標）の項目が多いか等を試行的に可視化して共有をしました。

**感想** 「自分たちの活動を振り返るよい機会になった」
「SDGsは目標ではあるものの、連携するためのツールとして利用をするという使い方があることを学ぶことができた」
「未来のことを考える視点を持つことができて、とても勉強になりました」
「SDGsという共通言語で、事業の目標や取組を表すことができていいなと思いました。外部への発信もしやすいと思いました」など、学びや理解をすすめました。



## アクション2 協会全体の事業をマッピング（2021年12月～）

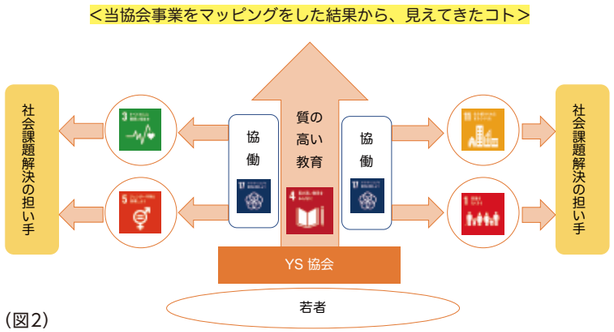
毎年実施している事業評価会議のタイミングで、全事業所の取組を全て「SDGs17の目標」でマッピングをしました。その結果、当協会での事業は「SDGs17の目標」の内、16の目標にアプローチできており、協会全体として幅広いテーマを扱えていることがわかりました。一番多くあがった目標は④「質の高い教育」、次に⑰「パートナーシップ」③「健康と福祉」⑪「住み続けられるまちづくり」⑤「ジェンダー平等」⑩「人や国の不平等」①「貧困」⑯「平和と公正」と続きました。（図1）




（図1）

結果から、当協会のSDGs達成に向けた取組の構造として、【教育】という大きな柱を中心に、他の専門分野で活動する関係者との【協働】によって、個別の社会課題にアクセスしていく構造が見えてきました。

今回のマッピングは、「当協会が提供する【教育】の機会を利用した青少年が、実社会で活動する専門機関とともに、課題解決を進めていく人材となって活動していく」といったストーリーを再確認し、「SDGs達成を担う若手人材を輩出する機関」として、当協会の新たな一面を見出す機会にもなりました。（図2）




（図2）

## アクション3 SDGsを意識した事業展開へ（2022年1月～）

2022年度事業計画の立案時に、「SDGs17の目標」の視点を意識し、より当協会事業の強みとなるよう事業プランを作成しました。

**今後について**

初年度は、足元を固めていく年として、「他人ごと」から「自分ごと」へ各職員の意識化を図り、事業立案に活かす流れをつくりました。今後は職員一人ひとりが、自分たちの取組が社会とどう繋がっているのかを客観的に捉えるとともに、今の取組をどのように展開していくべきかを問い直しながら、地域の実情にあわせた活動をすすめていけたらと思います。

そして、SDGsとの関連性を意識して取り組むことで、組織や社会の持続可能性を考えつつ、協会事業の強みを活かしていき、また、社会にわかりやすく協会の取組を発信するコミュニケーションツールとしてもSDGsを活用していきたいと思います。

（図3） SDGsとは

SDGsは「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称で、2015年9月の国連サミットで採択された国際社会共通の目標です。「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030年を年限として達成するべく掲げた「17の目標」と「169のターゲット（具体目標）」で構成されています。

# ユースかわら版

広報誌に関するご意見・ご感想はこちらへ

報告

## 多文化体験プログラムしています

伏見青少年活動センターでは、ロビープログラムのひとつとして、いろいろな文化を体験できるミニイベント『World Experience』を実施しています。

6月は、韓国からの留学生をゲストにお菓子づくり（カルメ焼き）と韓国語を使った遊びを、8月には韓国人留学生に加え、台湾・アメリカ・フランスから渡日した若者と一緒に、日本と海外の昔遊びを行いました。参加した中高校生からは、「韓国が好きだから参加した」「実情を知ることができて良かった」「普段海外にルーツをもつ人と接する機会がないので、一緒に遊べて楽しかった」という感想が寄せられました。6月のゲストが、「面白かった」と8月にも引き続き参加したり、プログラムが終わってからも残って話をしたりする場面も見られるなど、継続して実施しているこその良さがあらわれています。

今後も、〝遊び〟シリーズや料理プログラムなど、気軽に多文化を体験することができるプログラムを実施予定です。ぜひセンターホームページで確認してみてください。

## 憩いの場

『憩いの場』は、京都奏和高校と伏見工業高校の中にある学校内の居場所です。週に1回、主に金曜日の放課後と休み時間に、高校生がスタッフとおしゃべりしたり、ボードゲームで遊んだり、ぼーっとできたりするような場所です。当協会が、インターン生やボランティアと一緒に運営しています。

2学期はじめの9月2日にはちょっと元気になれる企画として縁日を実施しました。射的とスーパーボールすくいという王道の内容に、「この取り方はアリ!?」「○○は何個取ってったん？勝ちたい！」と童心に返ってはしゃいでいました！

## わかもののまち サミット開催！

11月6日、中央青少年活動センターにて『わかもののまちサミット2022』が開催されました。このサミットは静岡に拠点を置く「NPO法人わかもののまち」によるイベントで、当協会とユースカウンシル京都も実行委員として参画しました。『若者の表現があふれるまちには、どんな〝しくみ〟がありますか？』と題したサミット当日は、全国各地で「わかもののまちづくり」を実現すべく活動している若者や関係者が一堂に会し、子ども・若者の「声」が聞かれる社会づくりや、それぞれの「参加」のカタチについて意見を交わしました。前日はフィールドワークで京都の活動を案内したり、当日はひとつの分科会をプロデュースしたり、同世代で活動する若者と出会ったり……ユースカウンシル京都メンバーも充実した様子がうかがえました。サミットを経て、改めて若者の多様な「参加」を実現していきたいと思いました。

## 欧州ユースワークの現場から学ぶ

法政大学平塚眞樹教授の科学研究会で、9月にアイルランド・イギリス・フィンランドを訪れました。

アイルランドでは、YMCA Cork『The Rise Project(就業プログラム)』、イギリスでは、Bollo Brook Youth Centre、Park Royal(工業地帯)にあるトラベラーズ居住地とYINKA ILORIスタジオ等、フィンランドでは、Iris Helsinki(LGBTQAI+やPCゲーム活動)を視察しました。

最も印象的だったのは、イギリスのユースワーカーが多くの人との出会いから始めたプロジェクトです。例えば、アートスタジオYINKA ILORIは、ユースワークを動画で見せる取組ですが、アーティストとのコラボだけでなく、製作に若者も関わっています。

ユースワーカーだけでなく活動への思いを共有した人たちが力をあわせて取り組む姿は、ユースワークの理想的な形だと思いました。

また、フィンランドのヘルシンキ市（京都市人口の45％の市）にユースセンターがなんと45ケ所もあり、ユースワークが日常生活に根付いてることを感じました。

これから

## センターで出張相談します！

子ども・若者総合相談窓口では、中央青少年活動センター内で相談業務を多く行っています。

しかしながら、相談ニーズはあっても、一歩踏み出せない方もいらっしゃいます。そこで、私たちが、出張相談を行うことで、「相談する」ということのハードルを下げられないかと考えています。そこで、本年度、11月～3月まで、伏見青少年活動センターで定期的に『出張相談会』を行います。日時は、第2月曜日の12時～14時まで。予約不要で、ひと枠30分程度です。当日、伏見青少年活動センターの窓口に「相談したい」とお声掛けください。

対象は、京都市内に在住または通学先、勤務先のある39歳までのご本人及びご家族、関係者の方です。将来や仕事、友達や家族、学校や職場のこと、自信が持てない、居場所がないなど、モヤモヤしていることを一緒に整理して、助言や適切な支援機関などの紹介をします。

どうぞお気軽にご相談ください。

## 事業 ヤングケアラー

家族のお世話のために、自分の時間がとれないと思ったことはありませんか？　友達にそんな人はいませんか？厚生労働省の実態調査によると全国の中学2年生の17人に1人が何らかの家族のケアをしているそうです。

『いろはのなかまたち』は、子ども・若者ケアラー（ヤングケアラー）当事者のつどいとして、友達には言いづらいことを話したり、他の人の話を聞いたり、ケアから離れて安心して自分の時間を過ごせる場所です。

今年度は、メイクレッスンやお茶会などイベントも企画して、「自分のことを振り返る機会になった」「リフレッシュできた」などの感想をもらっています。随時、参加を受け付けています。不安なことあればお問い合わせください。

毎月第2土曜日　14時～15時半に中央青少年活動センターで実施しています。

★当協会職員による「ヤングケアラー」研修会講師派遣も実施しています！お気軽にご相談ください。

## 故 遠藤 保子先生を偲んで

2021年5月に逝去された遠藤先生の偲ぶ会を、6月に生前関わりの深かった方々と執り行うことができました。

遠藤先生は1988年財団設立から理事として就任され、のちに専務理事、理事長、顧問として永年にわたり、協会の運営にご尽力いただきました。

気さくで親しみやすい遠藤先生は、協会、青少年の良き理解者でした。

Chance (チャンス) をつかまえ
積極的にChallenge (チャレンジ) し
よりよい自分にChange (チェンジ)

この～Chance Challenge Change～の3つのCは、遠藤先生が挨拶や職員入職式などで若い人へのメッセージとしてよく使われたステキな言葉です。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

## ご寄付のお願い

当協会では、ユースサービスの理念のもと、以下を柱として様々な取組を行っております。

・若者が本来持っている力を発揮する場づくり
・若者が課題を乗り越えていくための支援
・若者の市民参加、地域社会への参加を促す
・ユースサービスの活動を広く知ってもらうための活動

| | |
|---|---|
| 郵便振替口座番号 | 00950-2-172487 |
| 口　座　名　義 | 公益財団法人 京都市ユースサービス協会 |

※いただいた寄付は広報誌『YOUTH SERVISE』にも活用させていただきます。ご協力お願いいたします。

発行：公益財団法人　京都市ユースサービス協会
〒604-8147 京都市中京区東洞院通六角下ル御射山町262
TEL: 075-213-3681　FAX: 075-231-1231
E-mail : office@ys-kyoto.org　HP: http://www.ys-kyoto.org
印刷：株式会社谷印刷所　デザイン：株式会社オム